
所在探し -ver.Remake-

花形 茶屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

所在探し - ver・Remake -

【Nコード】

N2641Z

【作者名】

花形 茶屋

【あらすじ】

始まりはいつも突然。朝一番の占いで最悪の一日を知ったある生徒は、無理やり友人と街へ買い物に出かけ、爆破テロに遭う。

自分がいる場所。そこは一体どこになるのだろうか。母が待つ自分の家？ 友人のいる学び舎？ 愛する人の隣？ 帰ってきた彼は、記憶障害という枷を背負い、周囲との摩擦を生み続けていく。

価値ある生。それは一人では作湮出すことは敵わないものです。

この物語は、「所在探し」鬼となった者は何を思う？の改稿版

です。

零枚目：地獄の穴（前書き）

リメイクしてみました。

文章に加筆・削除を行い、大筋はそれほど変わったところはありません。

せいぜい詳しく、できるだけ深くしたつもりですので、流し読みでも大丈夫かと思えます。

知っている方は、温かい目で。

初めての人は、広い心でお読みくださいませ。

では、とつぞ。

零枚目：地獄の穴

さんさんと輝く太陽の光が床を白く照らす。

最低限の換気として、申し訳程度に取り付けられた鉄格子の窓。

其処から見えるのは青い空と白い綿雲。それから時々たま小鳥や輸送船が飛んでいるのを見ることができた。

けれど、彼方と異なり、此方は外の青と白が楽園の色に見て取れた。

まるで対称的過ぎる劣悪環境。

天国と地獄ほどに等しい苦悩と絶望。

この鉄格子一枚が僕らに理想郷を夢見させてくれていたんだ。

破裂音。

いつぱいに詰められた水風船。

それが爆ぜたような音で、僕は目を覚ました。後頭部を鈍痛が支配し、思考を鈍らせた。視界もぼやけ、まるで水中で初めて目を開けた様にすべてがあいまいな視界。

「あ、起きた」

幾らかの瞬きと眼球の運動の最中に背後から声が掛けられる。それは此方の状況を確かめるようなものではなく、起こったことをそのまま口にしたようなもの。

そして、何故か馴れ馴れしさを感じた。

「初めまして。ここへ来る子で君みたいなのは始めただから、ちょっと興味が出たの。ごめんね、寝顔覗いちゃった」

誤魔化すように微笑むその女の子は、存在そのものが浮いていた。此処にいるべきではない、存在することがおかしい、不釣合いだと思うほどだった。

何故なら、僕らがいるベッドの脇には七、八歳程度の子供の死体があつたからだ。

白い髪で顔の血色はもはや土色。だが、苑が死んで間もないという事を知らせるかのように、少年の凭れ掛かっている壁と床を青い液体が広がっていた。

そして、その物体は時より脈を打った。

「ん？ あ、ごめんなさい。……………何が何だかわからないよね……………えっと、とりあえずこつち向いてっ」

痙攣する少年の軀から半ば無理やり目を逸らせるように、女の子は僕の身体を引き寄せた。

「また一人逝っちゃった」と、微かに彼女は呟き、顔を伏せている。その様子には僕は何かをするどころか、自分が何故こんなところにいるのかを知りたい一心だった。

その時だ。

衝撃的な事態で混乱する僕の脳に、この空間に扉の存在を知らせる物音が響いた。

扉から現れたのは、まるで汚染環境の有害物質を調査するような格好をした者達だった。大きな袋を抱え、数人がかりで目的のモノを袋に放り込んでいる。最後に彼らは汚れた場所を粗雑な作業で浄化して出て行った。

「ねえ、大丈夫？」

思考停止。

けれど、記憶は新たに取り込んだ情報を補完しようとする再生作業を反復していた。

目、鼻、口と至る穴だけでなく、肉を突き破り青い飛沫を飛ばし

た少年が倒れていた。

そして、青くあるが、それは間違いなく彼の体に流れている液体。信じられない思いだが、僕の記憶はそれをしっかりと保存できていた。

「あの子は失敗作なの」

耳から取り込んだ音声情報に、鼓動が暴れた。一度大きく高鳴り、そして徐々に速くなっていく。

「此処は、地域別、年齢別、種族別に部屋を振り分けられているの。あの子はハンヴィナの生まれだって言ってたわ。三歳の時に両親をなくして孤児院に入ったんだって」

それでも楽しかったって聞いてたわ、そう彼女は語っていた。

けれど、僕は未だに何が何だかわからない。

此処は何だ？

今は此処が何処かというよりもどのような場所なのかという事が恐ろしいほどに知りたかった。

あんなことが平時で起きる場所だと？

「此処は山奥の名も無い研究所よ。ああいった子は珍しくないわ。大人が実験に失敗すれば、ああなるの。私たちはもう死ぬも生きるも同じなのよ」

女の子は一定の調子でそう吐いた。

死ぬも生きるも同じ？

大人の失敗で死ぬ？

何でそんな いや、それよりも、今

「僕の思ってた事が……………」

「ごめん。私、そういう体質なの。人の気持ちの色になって見えるから、あなたが今すごく不安で、怖がっている事がわかる」

その時、僕は初めてちゃんとその子のことを視た。

白と見紛う灰色の髪。

黒よりも赤黒い色に近い肌。
衣服の上からでも分かるほどやせ衰え、節々が浮いた枯れ枝の様な細い手足。

そして、何よりも目を引いたのはその瞳だった。

髪や肌の艶を失い、最低限の栄養も危ういと思われる憐憫を引く彼女の外見の中で唯一魅了される一点。

それはまさに紅一点　否、虹一点。

「……………きれいな目……………」

「うれしいな。そう言ってもらえるのは久しぶりかな」

思わず零した一言に、彼女は眉を寄せ、頬には赤みを差した。頭を掻く仕草も照れ隠しであることは容易にわかった。

けれど、あからさまな彼女の照れ隠しと、自分でも言おうと思つての行動ではなかった分、遅れて羞恥心が喉から頭にせりあがってきた。

「ねえ、あなたのお名前は？」

「フィレル。君は？」

「私はネリミエリス・コーラン。ネルって呼んでね」

握手を交わし、お互いに嗤い掛ける。

けれど、その様子は誰が見ても、おかしく、やはり状況とは不釣り合いな光景。

「……………此处で何が起こつてるの」

握手した手を離さず、僕はそう尋ねた。その時、繋いだネルの手がビクツと震えたのがわかる。

「話、私から聞かなくても、すぐに……………」

ネルは言いたくないという様子をありありと醸し出して、証言を拒否する。

けれど、僕は知りたかった。

あの子はどうしてあんな風になったのか。

僕らも同じようになるのか。

一番は本能的に死が迫っている事を感じ取ったからだろう。

「教えて、ネル」

「……………」

「ネル」

「……………」

「わかった」

其処で漸く僕はネルの手を開放した。

ネルは、その手を抱きこむようにして、もう片方の手を重ねた。

それだけ、口にすることが憚られることらしいことが感じ取れる。

ちゃんと聞いてねと前置きをして、彼女は言った。

「此処は連れ去った子供で人体実験をする施設なの」

いつもの清掃員が来て、時間にして僅か五分。まるで軽く掃除でもするかのようには作業を済ませて出て行った。

また、この空間に存在する人数が一人減った。

自分もいずれあなるのだろうか。

灰色の天井と硬いベッドの上で寝る感覚は、最初の頃と何も変わらない。変化があったのは、周囲の壁や床に飛び散った色取り取りの血痕と抉ったり凹んだりした破損。

それでも、一番変化　改造は自身の体だった。

鉄格子の窓から降り注ぐ太陽光が、白から徐々に赤に変わり遂にはなくなってしまった。

此処に入れられた子供　実験体には圧倒的に活力がない。

瞳は光を失い、どんなに綺麗な色をしていても、隈や半開きで生きる希望が見出せていなかった。

そして、健康でもなかった。痩せこけた頬、枯れ枝のような手足が、此処の食事が満足なものでないことを容易に想像させる。髪にも艶がなく、ボサボサで、抜け毛も多かった。

「そう言えば、あなたの髪はどうしたの？ 最初に聞こうと思って忘れちゃってたわ」

無気力な生きる屍に等しい集団の中で、何故か彼女だけは異例だった。髪や肌の艶がないのは同じだし、体の肉付きも悪い。条件は同じはずだった。

けれど、ネリミエリスは他の子とは違った。

「フィルの髪白いよね？ 地毛？ 目は？ どうして赤いの？」

ネルがまじまじと僕の顔を覗いて尋ねた。

まるで眼球を通して、自分の中身を覗かれているようでいい気はしないが、彼女の異常な行動は、どうにも制しきれない。

「髪と目の色は元々と答えるけれど、まずこっちも訊きたい」

「はい、フィル君。何でしょうか？」

あたかも教壇から指差した体をでネルは応じた。

「何故、僕の呼称がいつの間にかに『フィル』へと変更されたんですか、コーラン先生」

僕は自分でも面倒だと思う言い回しで、そう尋ねた。

わざわざ彼女のおふざけ半分の行動に付き合う事はないのだが、そうしなければ、彼女の機嫌が悪くなるのがこの数日で判明したので、致し方がなかった。

「チチチッ。フィルは分かかってないよ。私が『ネル』って呼ばれるなら、あなたが『フィル』と呼ばれなくてどうするのさ？」

「どうもならないと思う」

「うわー、つまらねー」

彼女は渋い顔をして僕から背を向けてしまった。

何でも彼女が言うには、二人合わせて言うと語呂が良いからだという。

ネルとフィル。

至って普通。良くも悪くもないと思うのは僕だけだろうか。

だが、この時は自覚がなくても、僕は常にネルのこういった自由奔放さ、天真爛漫、偏に明るく、日常的な笑顔に救われていた。

それまでの日常が唐突に奪われ、あり得ない非日常、それも自分のいのちと尊厳を他人が度外視した日々の中では、こういった日常的なたわいもない話がどれだけ掬いなのか計り知れないのだ。けれど、このわずかな日常の片鱗はすぐに失われる。

「実験体番号 三番」

その瞬間、部屋の空気が確かに変わった。

いつものように誰かだよばれたのだ。扉が開かれ、そこには誰語っているわけではないが、確かにその向こうには自分たちにとって必要でないことが待っていた。

「手を離して フィル」

その時ばかりは、いつもと違う感じがした。だからだ。

僕は、彼女を引き留めていた。

「……………ちょっと行ってくるだけ、だから……………」

僕らの行動を遺憾に思った視線が周囲から寄せられていた。周囲には、死んだ瞳がわずかな疑問というその身から生まれた光。

「何、心配してんの？ いつも通りの琴じゃない」

ネルはそう言った。当然の会話を装って。

向こうへは行ってはいけない。

そう僕の中の本能が告げているような気がした。僕は彼女の手を掴んで離さない。此処で別れたら、もう二度と会えることはない。直感した。

「大丈夫だから……………ね？」

蚊の羽音よりか細い声でネルが言う。

「駄目だ。今日は行っちゃいけない気がするんだ！」

僕の叫び声に、彼女は目御見えて動揺していた。

僕自身も思っている以上の声量に驚くが、それ以上にこの身に悪寒と不安があった。

そして危惧したことを証明するように、事態は進行した。

「何してるっ！」

予測外の行動に警棒のようなものを持った男達が駆け付ける。いつもなら、白衣をまとう研究員二、三人程度だけで、何かあった時のためだけに配備された存在である彼らがやってくることは滅多にない。

「早く離してっ、ファイルが酷い目に遭っちゃっ！」

「駄目だっって言ってるだろ？ 今、お前が行ったらもう戻ってこない気がするんだよ……………」

あと数メートル。

もはや扉のすぐ其処まで警棒が迫っている。大きくなる音は、外からかこの身からか。大きく鼓動する胸の振動。そしてそれに伴う恐怖。

今こうして掴んでいる彼女の手からもそれがじんわりとした湿気で感じ取れた。

それなのに僕は離さず、ネルも振り解こうとしなかった。振り払えば、僕の手が彼女の手から離れる。それくらい脆弱な縛りだったのに、彼女はそうしなかった。

単なる恐怖で体が固まったのか。あるいは。
けれど、そんなことは考えてもどうしようもない事だ。

「ッ、ファイル！！！」

視界がぶれ、僕は地面に叩き付けられた。

遅れてやってくる頭部の激痛に堪えるなんて真似は出来なかった。無様に苦痛を漏らし、顔を歪めた。涙も出た。自分が何をされたのか、すぐに理解する余裕もなかった。

けれど。

それでも、僕は

「さっさとその手を離せ！」

再度男が僕の体に警棒をぶち込む。

その度に僕は苦痛を表す。

息ができない錯覚。

意識が刈り取られそうになる。

だけど、絶対に

?大丈夫、独りになんかしないから?

今度こそ固く力を込めた。

絶対にほどけない固く握る。自分の持っている限りの全力で。

僕はネルミエリスの手を握って離さなかった。

「……………ファイルル、お願い……………離して、もういいから、もういいんだよ? ね、だから、離してよ……………離してえ……………」

ネルの声が震えてる。

泣いてるんだ、ネル。

声を出すこともままならない状態で、僕は彼女の顔を窺おうとしていた。だが、彼女は顔を伏せ、垂れた髪の毛で見えなかった。

俯せで床に倒れる自分とその傍に座り込む彼女。僕は自分の背中に何度も感じる痛みをぼんやりと感じつつ、ぼやけた視界で捉える。握られていない、自由なもう片方の彼女の手。それが僕の掴んで離さない手に添えられていた。

決して、僕の手を無理にほごうとしているわけではない。あくまでも触れているだけ。

その様子は、彼女の中に葛藤があることを意味しているのだろう。手を外さなくてはいけない。けれど、そうできない。何故ならば、僕の予想が当たっていたのだから。

彼女はきつと嘘をついていたんだ。

本当は、もう会えないことが分かっていた。

きつとそつだ。
だから、

「何だね、騒がしい。一体全体何事だ？」

いつまでたつても話そうとしないことに苛立った男が、僕の腕にけりを放とうとしたその時だ。

ぎすぎすとノイズのあるラジオのようなしわがれた声。それが僕らの騒ぎ立てている通路に響き、酷く耳に付いた。

とても耳障りな声の主は、すり足とともに僕の耳に雑音として届く。

「何だね？」

「すみません。実験体が暴れ出したので、それに対処しておりました」

警棒を持つ男がやってきた老人にビシッと敬礼をして通路の端に直立不動となる。

やってきたのは、白髪頭でオールバックを襟足で束ねた老人だった。白衣を着て、その手に何やら資料の束を持っている事からこの研究員の一人と推測できるが、これまで見た中では明らかに最年長の人物だった。

そいつは僕らを、いや主にこちらを、僕を視ていた。

「君は最近入った実験体だな？」

くぼんだ目をギョロリと光らせた老人が、僕に問うていた。

薄れゆく意識を保とうとして、けれど、身を起こすことはできなかった。

「ファイル、血がつ

体を起こして仰向けにしてくれたネルが口の端にたれていたら敷地を自分の服の袖で拭ってくれていた。

仰向けにされたことで、幾分楽になった僕は、老人へと視線を向ける。もはや、此処の大人たちには敵意しか持てない。そうなる

自然と、目つきも睨むようなそれになっていた。

「あんたは誰だ？ 此処は何処で、何の目的があつて作られた？」

この質問は、何度か個々の研究員にした。しかし、それに答える者はいなく、応える事すらしない者がほとんどだったのだが、

「私はソン・ジャリル。そして此処は実験所だ。どこかは答える気はない。そして目的は私の目的であり、それ以上答える気はない。

それで？ 君は何をしている？ 見る限りこの実験体と何かありそうだな。ん？」

その老人ソンが語ったことは、自室此方の欲しかった回答の半分も堪えてはいなかった。

ソンの名前など知ったことで、何かが変わるわけではないし、研究所という事は、数日居ればおのずと理解できるものだ。

こちらが欲しかったのは、『何の』というものだったのだ。

「まあ、君たちが知ったところでどうしようもないという事だ。だが、しかし、実験体を離してくれないと、私の研究が進まない。それは大いに私の問題となるのだ！」

手を前へ出し、大きなジャスチャーを交えてソンは叫んだ。

「人の神秘！ それを解明する事こそ人であるが故にすべき事。なれば、それはどれだけ神の意向に背こうとも、己が信ずる新たな神が認めてくれていれば、許される。非人道的であろうとも、狂人的であろうとも、楽しく愉快に充実感ある研究こそが私の生きがい！ その為ならば、私は何だってできる！ どんなに願われようとも、どんなに幼かろうとも、どんなに哀れであろうとも。私の研究さえ進めば、成功すれば、すべては許されるのだ！！」

瞼を開け広げ、今にも眼球が飛び出さんばかりの表情は、嫌悪感すら抱けなかった。

こいつ、目を見てもそんな気がしていた　こいつは狂つてやがる。

嫌悪感すら抱けない。

それは興味の皆無を意味する。嫌いという時点で、それは対象に

何らかの感情を抱いていることに他ならない。

そして、コイツは自分とは次元が違う感じがした。言うなれば、言葉が通じていないに近いだろう。

僕は苦痛を堪えて立ち上がった。

その時、わずかな言葉を放つ。

「え？」

突然、耳打ちされたネルは、困惑した表情を見せる。

そして、彼女に囁いたことと同じことをソンに向けて発した。

「　　つてやる」

「何だつて？」

感情の高ぶりに乗じて声が漏れたために、彼にははっきりと聞き取れなかったようだ。

なれば、もう一度、今度ははっきりと宣言してやる！

「俺が実験体番号三番の代わりに　　ネルミエリス・コーランの代わりになってやるつて言つてんだよッ？」

言つてやった。

腹に思いつきり力を込めて叫んでやった。

ソンは一瞬呆気にとられた顔をする。しかし、すぐに奴は笑みを浮かべた。

気持ち悪い笑みだ。

狂い人にはお似合いの変態な表情だった。

「面白い。全く以て興味深い発言だ。良いだろう。今日の実験は『薬品の投与』だった。それには健康な実験体の方が好都合だ。

おい、こいつを連れていくぞ。三番を中に入れ直しておけ」
「ハッ！」

ソンに引つ張られ、通路を進む際に一度振り返る。

閉まる扉の隙間。

そこから白い髪に隠れた虹の瞳が、最後までこっちを見ていた。

零枚目・地獄の穴（後書き）

実際のところ、そこそこ以前投降した話の改稿はできています。
ですので、しばらくは既視感あるものになるとは思いますが、そ
れ以降の話にご期待くださいませ。

巻目：今日の気分は、雨時々大嵐

きつかけは些細なもの。

「そろそろ街に買い物に行かないとねー。……………よし、今日行きましょう」

メリ姉（本名メリアル・ハイジエリカ）が、唐突にそう言った。彼女の行動が突発的な事例が多い事は今に始まった事ではない。誰よりも率先し、積極性を持って行動する。そうでなければ、彼女が担う役職は誇れないだろう。

しかし、それが私用であった場合は大概身内に何かしらの被害が出る。

その理由として、彼女が楽しければ、良し。これに尽きるだろう。そんな彼女が今日、唐突に出かけようと言い出した。

そして、それを私は認可した。
というのも、それにも理由というものがあって、実を言えば、ここ最近の天候は芳しくなかった。じめじめと肌に張り付くような湿気は、洗濯物を意地悪く湿らせ続け、私達の行動範囲を著しく狭めたのだ。

にわか雨の時もあれば、長く霧雨が続く日など様々だ。雷激しく、百メートル先も見えない豪雨の日もあったくらいだ。

そんな日が続く、人の気分も駄々下がりとなり、しばらくは雨の音ばかりが耳に残る日々。

しかし、そんな日々に終止符が打たれる。そう。

今日は久しぶりに文句なしの青天だった。雲一つなく、何処までも青い空。僅かにひんやりと心地よい風が首筋を撫でていく。

これまでのじめじめと不快な気分は一転し、とても清々しい。

この天気の外へ出ない者はいないというくらいだ。

「ねえ、アリスも行かない？ 千春ちゃんちはるは来るって言ってたよ？」
メリ姉は、テーブルにぐでぐとしな垂れて、こちらを脇目にする。
しかし、私は了承したくなかった。

彼女が出かける事には何ら問題ない。

彼女と出かける事にも全く問題ない。

むしろ、彼女と出かける事は周囲から良くも悪くも注目される結果を生むことになるだろう。

今もこうして項垂れている彼女だが、異性の目から見れば、とても魅力的だろう。ぼんやりと微睡んだ瞳に長い睫、キューティクルの輝く麦穂色の長髪、ミルク色の白い柔肌は目立ったシミも傷もない。

加えて、スタイルも出るところ出て閉まるところ仕舞ったプロポーション。

さらにさらに加えるのであれば、彼女はこの学園のボスだ。

「……ボスって、何だか私が悪者みたいじゃないのよお」
しな垂れた状態での上目使い。そういう態度も異性の目は、自動的に愛らしさへと返還されるのだろう。

しかし、長い付き合いをさせてもらっている私から見れば、だらけているようにしか見えないのだから不思議だ。

「ねえ、行こーよー」
「……………」

先程のボス発言を横に置き、ぶうぶうと抗議する姉であり、先輩、そして学園のボス『生徒会長』。

校舎を挟んで反対側に位置する自分の寮から、わざわざ私の部屋があるこの寮にやって来て、あまつさえ勝手に部屋に上がり、お茶まで拵こまえている始末。

これで我が学園の生徒会長であり、自分がこの学園に入ってから今日まで毎日と言って良いほど世話を焼き、焼いてもらった存在だ。

そんな人がせっつかくの天気だから、買い物に行こうというのだから、行かないわけにはいかないのが普通なのだが。

「もう。何でそんなに拒否するのー？ 私が嫌いなわけ？ はっ！ 遅めの反抗期かっ！？」

よよよと袖を目尻に添えて、嘘泣きをするメリ姉。

私はそれに呆れながらも、答える。

「メリ姉。今日はあまり良くない事が起こるかもしれないんですよ……………」

私がそう言うと、メリ姉はピタッと御ふざけを止め、振り返る。

その顔は「何で？」と言っているのがはつきりと理解できた。

「だって、今日の私たちのカードは『塔』^{タワー}でしたから」

私は、机の隅にまとめられたカードデッキの上から一枚とって彼女に見せた。

すると、メリ姉は不服そうに唇を尖らせて、むうと唸りだす。

「『塔』^{タワー}のカードは破壊や災厄を意味します。ちなみに個人の占いもやってみましたが、結果として私は絶対的な『塔』。メリ姉は三回に一回は『塔』でした。千春は『運命の紐』^{チャンス}でしたから千春を連れていくのが得策ですよ？」

自分たちの運勢が最悪であることを知った生徒会長様は、むくれ続け、茶を啜り始めた。

そもそも、何故、昼間から自室で暢気にお茶をしているのかと言えば、それは今日が休校日であるからだ。

私は寮の自室で日課である朝の占いをして、今日が不吉な日だと知ってしまった。だから極力外出を控えようと思っていたのだ。

しかし、不吉と出たのだから、その結果に伴う事態は起こるのが、自然の摂理というやつらしい。

まず、朝食を食べようと思う。

しかし、生憎と部屋の冷蔵庫は空だった。仕方なく食堂へ向かったのだが、それまでに生徒とぶつかったり、ふざけている男子の流

れ弾が当たったりと寮から出るだけでもひと苦労だった。この時点で今日の自分がついていないだと、再度理解した。

食堂についてはもう災難、むしろ天災だと思った方が気が楽だといふほどだった。

まず、配給の列にいと、割り込みをされる。

次に、欲しかったデザートが朝だというのに完売していた。

そして極め付けが

。

ガシャン

「ガラス製の物を使用していない食堂に感謝をしよう」
そんな馬鹿なことを口にしてしまうほど、私は頭に来ていたらしい。

呆然とする私。

目の前で泣きながらあたふためく女子生徒。

やや群がる野次馬の生徒、教師陣。

複数のガラスが私の頭に降りかかった。当然のことながら、グラスの中身は盛大にこぼれる。

詰まる所、それは液体である。

また、早朝に用意された身も凍る冷水だ。

水を被る瞬間だけでなく、このような危機的な瞬間に人間という生き物は、素早く状況を見る力があるようだと実感する。

頭上より降りかかるグラスときらめく冷水。

足を滑らせ、尻餅を取る事になるだろう一人の女子生徒。

そして、これらの原因となったらしい白いナプキン。

加えて置くが、私は決して背が高い方ではない。むしろ、平均より低く、よく間違われることがあるほどだ。もう少し身長が高ければ、間違われることもないのだろうけれどいつも思っている。

つまり、全く礼儀知らずなものに言わせれば、小っちゃい私は、思いつきり水を頭から被ったわけだ。

ずぶ濡れのままでは食事など出来るわけがない。

私は、事態の收拾も行わずに、ずぶぬれのまま一度部屋に帰る事にした。

そして、ついには着替えを探すのも億劫になり、ちよつど乾いて畳んでおいたジャージに着替えてベッドに飛び込んだ。

もともと休日は大して何もしない。そのため朝食など取らなくてもやっていける。そんなわけで私は部屋から出ないで、今日は一日中買い溜めていた本でも読破してしまおうとしていたわけである。

そんな時断るどころかノックもなく、人の部屋でお茶や世間話をしに来たのが、生徒会長様というわけだ。いくら人望が厚く、全生徒から人気があるからといって、他人の部屋にそれが当然のように上がられては困る。

こちらにもプライベートがあるわけだから。

そう考えている時、またしても全くの了承なしに扉が開かれた。

「メリ先輩？ 準備できましたよ？」

軽快な（あるいははずかしくとした）足取りでやってきたのは、軽くカールしたすみれ色の髪を揺らし、少し私の強そうな女子だった。「用意できたのね。 ほらほら。 千春ちゃんは今もう用意出来ちゃったわよ。 アリスも早くしなさい」

メリ姉がカップ（これもいつの間にかに用意した）を片手にそう言う。

「全くアリスは鈍間ね。 あ、クツキー貰い」

メリ姉の隣に座る少女狩園千春は、悪態をつけて、テーブルの上のクツキーの籠へと手を伸ばす。

(あれ、私が楽しみに隠したお菓子だったのに……………)
そう思おうとも、この二人を止められるような人物は此処にいないどころか、この学園の教師ですら微妙なのである。

あれ？ 私はもう行くことになってるんですか？

そう疑問を抱くけれど、私はそれよりも強く言いたいことがあった。

「あの、二人とも」

「ん？」

「何よ？」

私の呼び掛けに二人がそろって振り向く。

「わかってますか？」

「何が？」

「濁してないではっきり言いなさい」

私がそう尋ねると、メリ姉は何をという顔を、チハルは面倒臭そうな態度をされた。

よく考えてほしいものだ。

女子生徒二人が校舎を挟んで反対側に存在する【男子寮の一室】に堂々とやってくるのは、如何なものかを。

私がそれを問いただすと、

「うーん、アリスは確かに男の子だけど、存在は女の子なんですよ？」

メリ姉、意味不明です。結局どっちなんですか。

「もう、そんな細かいこと気にしてないでさっさと着替えなさいよ。今日は先輩のお誘いで買い物に行くんだから。決まった事には時間厳守で行動しなさい！」

チハル。男子生徒の部屋に、女子生徒が二人もやってくることは、細かい事に入らないと思います。

むしろ大事ですね。

しかし、そんなことは彼女らには関係がないのだった。

「さ、早いとこ着替えましょ。今日も可愛い服を用意したのよ」

「ほんと可愛いですね。これではアリスが衣装に負けちゃうんじゃないですか？」

メリ姉とチハルが私に背を向けてきやいきやい騒ぐ。

逃げなければ、死ぬツ？

「あら〜ん？ 何処に行くのかしらあ？」
捕まった。

わずかな本能が察知した危機に対して、迅速な対応をしたが、彼女らはそれを予想し、いつの間にか私の足に紐をかけていたのだ。

私が引つ掛かったことで、がっちりと結ばれた紐は、少しも私の足を捕らえて離さない。

そしてその紐の先を持っているのは、当然知れたこと。メリ姉である。彼女はくるりと此方に目を向け、笑みを浮かべた

メリ姉、怪しいよ。その笑い声もなんか呪文みたくも聞こえるし。あ、終わったな、これ。

観念したアリスはすぐに、その場で、着せ替え人形のような扱いを受ける事になった。

そして、最後の抵抗とばかり腹に力を籠め、

「もうっ、
いいいいいやああああだっ
てぶあああああああ
あっ！」

彼女、いや彼の悲しき方向は【男子寮】を越え、外まで響いたと
いう。

アリス・ウイディアン。

十四歳。

某学園において中等学部二年五組に所属。

性別。女子

ではない。

女顔をコンプレックスにしている歴とした男子である。

巻目：今日の気分は、雨時々大嵐（後書き）

小出し戦法ってか

あんまりつらつらと長く続けても、飽きが来ると思っのでした。

式枚目：新たな友情？ 見えざる影

「あつ」

散々着せ替えをさせられた私は、彼女らが納得のいく衣装になるまで糸の解けた人形のようにじっとしていた。

結局完成した今日の衣装は、あれだけ時間をかけたにも関わらず、普通に女子の制服となった。

チハル曰く、「いろいろ試したけど、胸ないし、シンプルな制服の方が胸なくてもいけそうだった」とのことだ。

私はそもそも女装なんてしたくないのに。などという事は出来ないだろう。彼女たちが楽しそうにしているのは、なんとなく嫌な気分ではない。

かといって、私が女装を好きになるという事はない事は断言しておく。

そうして自室を出た。

上機嫌のメリ姉とチハルが見かけ完璧な女子へと変身した私の両手を取って、駆け足で教務棟へ引き摺られていく。

外出許可を取るためだ。

此処は基本的に全寮制で、学園外に出るにも、外出届なるものを申請しなくてはならない。

寮から教務棟へ向かっていたその時だ。

私は今日一番の災厄関係者と再度顔を合わせた。

明るい赤毛のショートカットの子。休日だというのに、制服を纏い、その胸元のタイ留めの色からして、下級生であることが窺えた。事故とはいえ、今日一番からやらかしてしまったのだ。簡単に忘れられるような楽天家には見えないその女の子は、私と目が合った途端に顔を真っ青になった。

「済みません済みませんっ！！ ちょっとよそ見してたら足を踏んでっ！！？ じゃなくてっ、ナプキンが拭いてえっ！！！」

すごく錯乱している。

「ちよつと先に行つて下さい」

チハルとメリ姉は、状況を理解してくれたのか頷いて教務棟に向かつて再度走りだした。

走っていくことはないと思うが、それほど速くいきたいのかも知れない。

私はすぐにあたふたする下級生へと向く。

目に見えて、手は震え、首筋に冷や汗を流している姿は、彼女には悪かつたと思うが、小動物のようで、ちよつぴり愛らしかつた。

「何年生ですか？ 私中等学部の二年なんです」

錯乱する女の子の頬に触れて落ち着きを取り戻させる。

「あ、はい……先輩、私は一年です。一年五組、ロメリア・タツカリナと言いますです」

「そうですか。それでは兄妹クラスですね。何か困つたことがありますましたら、いつでも声をかけてください。相談に乗ります」

僧衣つてほほ笑むと、下級生ロメリアは強張っていた顔からやや生気を取り戻した表情になる。

「今日のことは気にしていません。むしろ、これも何かの縁ですからね。仲良くしましょう。それと私は用事あるので、一日以内と思いますので、何かあればまたの機会に」

それで別れようとしていたところ、

「……………あの、お名前は……………？」

「これは失敬。私はアリス・ウイディアン。アリスで結構ですよ。

ロメリア」

そう告げて私は脱兎の勢いで先に行つた二人を追いかける。

アリスが立ち去った廊下にて、少しの間呆然としている少女
ロメリア・タツカリナは手を合わせて、誰もいない廊下の向こう
を見ていた。

「アリスお姉さま？」

その様子は、憧れや恋慕といった感情か。とにかく彼女がアリス
に対して何頭の交換を持ったことは確かだろう。

優美な女装のアリスに好感を持ったロメリアが、彼女を彼だと認
識するのは遙か先の事だが。

確かに、ロメリアが間違うのも致し方ないだろう。

何せ彼は女顔で、女装をしてメイクまでさせられていたのだ。

少し髪が短い事など何ら問題ではないのだった。

学び舎【レピアス学園】からもっとも近い町までは、大体10キ
ロ近く離れている。

しかし、その移動時間は、5分から10分程度の時間で可能だっ
た。

その理由は、この国が最先端技術の固まりだからだ。

最先端技術の国と言えば、【アルフィンシ】と出るほどの知名度
を誇り、彼らが住む国は、近隣の諸国の中で一、二を争う最先端の
技術力を持った国である。

最先端技術国家と言われれば、金属だらけの堅いイメージがある
だろうけれど、この国は違う。

コンクリの地面があれば、石畳の地面もある。ビルがあれば、木
造の建物だってある。工場があれば、自然公園のような森林だって
あるのだ。入り混じっている事はないが、それぞれの区域にはそれ
らがしっかりと存在している。

よって、空から見たアルフィンシは技術都市と自然区域その他諸々が、国の中心できつちり分割された形に見えるのだった。

千春、メリアルの子二人と哀れながらも愛情を以てからわれている女装少年アリスの一行は、街に着くなり右へ左へ留まることなく、風の向くまま気の向くままに町を堪能していた。

その他よりも賑やかな彼らの脇をすれ違う者たちがいた。

それは通行人なれば、別段おかしくはなかっただろう。騒がしくも楽しく賑やかな商店街で人とすれ違わないわけがない。

しかし、そのすれ違った通行人モブの中に、二つだけ彼らを中止する存在がいた。

特に、黒髪の少女に彼らは目を向けていた。

しかし、すれ違いざまであったために、それほど長い時間ではない。ほんの一瞬。

「これからどうする？」

使い古され、裾はボロ切れと化したローブを頭からすっぽりかぶり顔を隠すその二人組。

片や170前後の平均的な背丈。

片や140前後のとても小さい身長。

その二人は、賑やかな商店街からずれた存在でもあり、わずかながら周囲の視線を浴びていた。

しかし、彼らは気にせず、人ごみをかき分けていく。

「一先ず、何か食べよう。町にいる間に食事を済ませないと。それと食料も調達しておかないとすぐに移動できないからね」

「だが、もう移動することなどないと思う」

「まだわからないさ。完全に終わったわけじゃない。さあ、入ろう？」

大きいほうのローブがそう言うと、小さいほうが頷いて近くのカフェに入っていく。

しかし、店内は一杯でテラスに行く羽目になり、二人は一番奥のテーブルでやっと腰を下ろすことができた。

ローブを脱ぎ、それまで隠していた素顔が露わになる。

一人は白髪青年。年の頃は二十代前後。

もう一人は、長く見事な金髪の少女だった。こちらは、十代半ば未満といった幼さだった。

注文をして、五分後に料理を乗せた盆をもった給仕がやってくる。彼は慣れた手つきで料理を並べていくが、それを止める声がかかった。

「それは私」

給仕が青年の前にグラスを置いて、注ごうとするのを少女が止めた。

給仕はすぐに青年と少女を見比べ、戸惑い始めたが、

「大丈夫です。彼女はこんな形ですが、歳は僕より上ですから」

それを聞いた給仕は、目を見開いて驚く。が、しかし、すぐにグラスを彼女の前に持っていく、紅いアルコール入りジュースを注いで立ち去った。

「この姿はこういう時、不便でならない。幻術でも掛けていようかな」

少女は、仏頂面でグラスを口元に持っていく、小言を吐く。

青年はそんな少女を見て、赤い瞳を細め、口元を緩めた。

「しかし、あれがお前の兄妹？ 何とも可愛い奴。まあ、お前が一目見たいと言っただけの容姿ではあったね。胸は まっ平らだったけど」

少女がそういうと、青年はくぐもった笑いをもらった。大声で笑う事はなく、まるで少女に気遣ったような笑いをする。

それに少女は少しむっとすると同時に、自分が何かおかしいことを言ったのだろうか疑問を持った。

「いや、君は悪くないよ。あいつの見かけが紛らわしいだけさ」

「？」

「あの子は、男の子だよ」

「はい？」

少女は何を打ち明けられたのかわからないと言った素っ頓狂な声を上げる。思わず手にあるグラスすら滑りそうになり、慌てたほど衝撃だったらしい。

「え？ 何？ あれが？」

「そう。あの子は小さい頃から愛らしかったため、メリーアルーと一緒にいた麦穂色の髪の女の子に、それこそ着せ替え人形のようにもみくちやにされちゃってね、もはやあの学校で女装している女の子は珍しくはないんじゃないかな」

「え、嘘、だって、あんな可愛かったーッ！？」

少女は、思わず口を両手でふさぐ。

青年はやっぱりといった様子で笑みを浮かべ、そして、

「やっぱりかわいい物が好きなんじゃないか」

青年の言葉に、途端に少女は顔を林檎のように染め上げる。

その時、商店街に可愛らしい悲鳴が響いたという。

しかし、事態はそんな微笑ましく、甘くはなかった。

黒のローブをまとい、仮面で素性を隠す人影。その数実に15人弱。

町の外れの森に潜む怪しげな集団。それは、刻一刻とあるモノを目指し街へと迫っているのであった。

式枚目：新たな友情？ 見えざる影（後書き）

次回の投稿は、日曜日あたりになるでしょうかね。

ほとんどできていたので、もう投稿してもいいのですが、ルビなどの調整で定期的にしようと思っています。

では、今後とも乞うご期待くださいませ
悪しからず。

参枚目：オルゴールとともに終わる平穩

「……………あの、毎回こんな目に遭ってないですか、私……………」

化学繊維でできた毛束、一般に言うエクステを付け、シック & スマート 黒い制服（演劇部から拝借された）を着た少女が町中を歩いている。

エクステの髪に微妙な違和感を覚えるが、周囲から見れば、それを忘れさせるほどの要素がある。乳発色の肌と長い睫、赤い瞳が何ともいえない魅了を引く顔立ち。

？彼？が歩くことで、すれ違う者たちの視線を問答無用で引き寄せていた。

本人は周囲の目を気にしてあちこち見まわしているのに、その行動が彼を『何処かの令嬢で、下町を珍しく思っている』といった妄想を周囲の野郎ども見せてしまうのだ。真つ黒な服を召しているのも、目立たぬように変装をしているのかもしれないと。

しかし、彼アリス・ウイディアンからすれば、それはただ羞恥心と知り合いがないか警戒しているだけであった。

まあ、それを見て、彼の後をついていく女子二人は思惑通りに事態が進行して、大変ご満悦だったりするが、それを彼は知らないし、知る余裕もなかったというのが現状だ。

「ほら、こんなの付けたらもっと良いかもしれないわよ？」

『おおおっ！』

私がチハルとともに露店の品々を見てみると、背後で何やら感動の様なものが上がった。

そのちよつと前に、メリ姉の声と更なる東部の違和感。

振り返れば、其処に消えない羞恥の塊、肩口より長い黒髪に、赤い瞳、そして、コンプレックスの顔立ち　　間違いなく自分の姿があった。

ちよつと視線をずらせば、笑顔咲き誇るメリ姉が、手鏡をこちらに向けていた。

しかし、それにしても、

「……………何、これ…………？」

黒猫がいた。

緑の装飾が施された手鏡の中に映る少女は、奇しくも女子に見えてしまうが、おかしな部位が一か所ある事に気付かないはずがなかった。むしろ、メリ姉がそれに気付かせたくて鏡をやや上方に向けているのだから気付かないはずがない。

「ああああ……………」

馬鹿な野郎どもの悲しげな声が消えた。

手には胸部から外された、黒い装飾力チューシャ。何が付けられていたと言わない。むしろ、私が見たものから察してほしい。

しかし、誰がこつ恥ずかしいものを付けていられるか。

外したその特殊な性癖を示すかのような力チューシャをもとあったところに戻してくるようメリ姉に押し付けた。

「可愛いだからつけてればいいじゃない

？ネコミミ？？」

両手で摘むようにその端っこを持ってメリ姉が掲げる。

私はそれを見ないように、チハルの背を押して次の露天に向かっ

た。
だが、おかしいことを考えていたのは、メリ姉だけではなかったようだ。

「アリス、自分の顔が可愛いって思ったことある？」

「ぶっ!？」

突然と有り得ない発言に、私は一瞬飲み物を吹きそうになった。

「……………嫌になった事はありますが、この容姿や声、小柄な体格に見惚れた事は微塵もありません。そもそも、そんなこと思っていたら、私はナルシストじゃないですか」

「それもそうね。じゃあ、男の人に恋し」

「ありませんっ!! あるわけないじゃないですかっ!! 気色悪いこと考えないください!」

とんでもないことをチハルが言い切る前に、私は叫んで否定する。全くどうしてこんな馬鹿げた質問をするのか。どうしたら、そんな質問が頭に過るのか、一度あなたの頭の中を調べてみたい。

それこそ無理な話なのだが、この二人にはもう少し自分を男だという認識を高めてもらわなくてはならないと思う。

「大体そんな話をしてどうしたんですか」

しゃがみ込み、露店のアクセサリーを見定めていた彼女に問う。

チハルが何を考えているとか、何がしたいのか私は彼女出ないかわからないけれど、こうして友人たちと買い物したり、どうでもいいような事を面白くしたりする時間は悪くない。

私だっっていつかは何処か遠い場所で、忙しい日々を送る事になるかもしれない。

卒業後だっって、この国から出て専門の学校に留学するかもしれない。

その時は皆と離れて、独りで何でもしなくちゃいけない。

あの学園に来た時は、まだ一人ではなかった。

私には兄がいる。たった一人に肉親であつた兄は、私の知つてい
る事も知らない事を知つていて、いろんな面で注目を浴びる人だつ
た。何よりも現生徒会長のメリ姉に加えて、今はもう卒業してしま
つたが、元生徒会長を含め、生徒会という学校全体を統率する組織
と深く関わりを持つていた。その為、度々行事で活躍することもあ
つたようだ。

そんな兄は今はいない。

代わりに、メリ姉がいて、チハルが隣にいた。

兄の背に隠れながらも他人を見つつ、兄を通じてメリ姉と出会つ
て、姉的存在のメリ姉が留学してきたチハルの面倒を見ているうち
に私たちは知り合つたのだ。

全部他人を間において広がつていった輪であつて、一人で広げた
ものではない。

そこが少しだけ寂しい。

けれど、兄は言つていた。

『人は必ず独りになる時が来る。それは絶対なんだ。だから、アリ
ス』

『後悔のないように』

『悔いのないようにしなくちゃね……………』

おぼろげな声と重なるように、チハルが言葉を漏らした。

兄と同じ言葉を今、口にしたことにも驚いたけれど、その理由を
私は知つていただけに、私は何か言う事はせず、彼女の次の言葉を
待った。

「……………私は留学生だから。いつかは国帰らないといけない。多分学
園にはぎりぎりまでいて、高等部を卒業したら帰ってくるように言
われるはず」

店が立ち並ぶ道なりに逝った先にある噴水広場。そこには八つのベンチがあった。噴水を背に四つ、その外周に噴水へ向かって四つ。チハルは内周の一つに腰を下ろし、空を仰いだ。とても遠くを見ているようだった。

長いようで、遠いように見えて、実は短いこれから。

約4年。彼女に残された期間は、あと4年だ。1年後中等学部を卒業して、高等学部で3年間通ったら卒業。それでおしまい。チハルは国に帰ってしまう。

「ずっと一緒に過ごしたいですよね」

私の口からこぼれたその言葉に、チハルはそうね、と返した。

その時、私からは彼女の顔は見えなかった。

見ようとすれば、見れた。

けれど、そうはしなかった。

「千春の国はどんなところですか……？」

ポンと浮かんだ事がそんな取り留めもない質問だった。

せっかく誘ってくれた買い物だから、楽しく行きたかった。だから、本当はもっと気の利いた事を言いたかったけれど、私にはそれが精いっぱい、それがとてもどこかしく苦しい。

きつと先を予想した私は、言葉選びが下手でも、今この時間の中でできるだけたくさんのお話を彼女と交わしたかったのだろう。

「……小さな島国よ。こっち見たく陸続きではなくてね、ホントに島が寄り集まって出来た国なの。私の名前に使われている『漢字』や『仮名』を用いて文や文字を書くの。もともとは近くの大陸から伝えられたものらしいんだけど、私の国ではそれが発展して、別々の方向に成長していったの」

落ちていく木の枝で、地面の土を削って、彼女が複数の線を描きだしている。

それには見覚えがあった。新学期クラスで自己紹介をする時、彼女の名前がどう描くのかわからなくて黒板に書いてもらった字だ。

「これで『狩野^{かりの}』、こっちが『千春』でしたかね？」

「そうよ。じゃあ、これは？」

枝の先を器用に操って、さらに漢字が書き出される。

「……えっと、『マタ』でしたっけ？」

「ふふっ。これは『又』じゃなくて『友』よ。同じ意味で『仲間』
つてのもあるわ。『仲』が良い『間』柄っていうことじゃないかし
ら」

それから千春が故郷の国にいた頃の話や東洋の言葉をクイズ形式
で教えてもらった。

時間にしてほんのわずかだ。

あともう少しでお昼という時間まで噴水広場でおしゃべりをして、
昼食を食べに行こうという話になったところで、誰かがいないこと
に私たちは気が付いた。

「……どうしよう、先輩落ちてきちゃったじゃない」

「大丈夫ですよ。あの人はああ見えてしっかりしてますし、食べた
いときに物を買って食べてますよ」

その所為で太った！と嘆き、ダイエットしなきゃ！と言っては、
私までもがカロリー制限のかかった食事をとらされる羽目になるの
だから、溜まったものではない。

「いいじゃない、一緒にご飯食べるくらいじゃない」

「それがメリ姉の付き合わせる理由が納得できなくて。」

あ

の人、自分で食制限駆けているのに、『私の周りで何の苦もなく美
味しくご飯を食べてる奴が気に入らないの！』と言って、ダイエツ
トゼリーを食べさせる……これが一緒に食事ができるからという程
度で誰が許容できようかつ」

あ、あははとチハルが渴いた笑いをする。

さて、そんな怒りは余所に、私達は昼食を求めて街に行く。

持って歩いて、財布にそこそこ優しいお手軽なファーストフード
サンドイッチ、総菜パンとパンが多く、おにぎり、あとはやつ
ぱりお菓子などが多かったが、どれも目を引く物だったことに変わ
りはない。

気が付けば、メリーアルのことを言えない嗜好に至っていたのだが、アリス自身は気が付かなかった。

そして、私達がたどり着いたのは、チハルの提案で、ミートスパゲッティの美味しいという喫茶店であった。

「店は至って普通でちよつと解り難いらしいけど、中に入ればすぐにわかるらしいわ」という彼女の言葉と店名『more』という単語から、その場所を特定するまでに至った。

そつたどり着いてしまったのだ。

「……本当に此処ですか？」

「私もちよつとばかり予想外過ぎて、言葉が見つからないわ」

わたし達は喫茶店『more』の前で立ち止まっていた。お昼までそこそこ人の出入りは良く、しかし、中に入って人の大半は声を上げていた。

「いくら中に入ればわかると言ってもですね、あれは」

「そうね、あれは間違いなくビビるわね。だって」

わたし達は窓から見える正面玄関の様子を見て、口をそろえて行つた。

『クマの剥製はない』

中の様子を見て、やっぱり少しどうした者かと戸惑いを抱く。

けれど、結局私たちは店の中でおいしく昼食へと至ったのだった。

だって、出てくるお客さんが幸せそうな顔をしてたんです。

どうやっても熊の剥製は抵抗を感じてしまうけれど、皆噂のスパゲッティをご所望訪れたらしくて、そのミートソースの甘酸っぱいにおいと共においしかったという絶賛を目の前で漏らされては、我慢などはかばかしく思えてしまう。

そんなこんなで、歩道に突き出たテラスの一席で食後のお茶を飲んでみると、一体どこで忘れてきたのやらといったメリ姉が走ってきた。

「もつっ！ 二人とも勝手にどっか行っちゃダメじゃん！ すっごい探したのよ？ 挙句に自分たちだけ噂のスパゲッティ食べてる

なんて
「

突風のように現れ、ブリブリと怒り出すメリ姉。その様子に周囲のお客さんは啞然。私たちは少しばかり恥ずかしい思いを抱く。

「あ、えっと、先輩、ごめんな
」

「なんて羨ましますぎるのよ！！ どう？ 美味しかった？ 噂は本当だったの！？」

もはや忘れたことなど、自分を含めて何処へ行ったのか。

メリ姉はしきりにパスタの感想を求めてきた。

そんな彼女に、チハルは羞恥心を忘れて呆然としている。

「全く説得力無いですよ。特にその両手にぶら下げている荷物がそうさせています」

プンス力怒るメリ姉の両腕には、大量の紙袋が提げてあった。洋服のものから食べ物物の袋まで多種多様様々である。どう見ても気が済むまで買い物をしていたら、私たちがいない事に気が付いたという事が見え見えだった。

「まあいいわ。それよりも見てこれ」

何やら可愛らしい小物を見つけたらしく、彼女は手にそれを載せて見せた。

一見すると植物の木彫り（レリーフ）があしらえられた木箱だ。

「此処を押すと……………」

メリ姉は木箱を開けてボタンの様なものを押した。

それと同時に彼女たちの背後で地面を揺らすほどの爆音が炸裂した。

たちまち黒い煙が上がり、逃げ惑う人々が恐怖の声を発して現場

から離れていく。

「……………メリ姉、それなんですか？」

「ち、違うって！ これはオルゴールなのよ！ た・だ・の・オルゴール！」

警戒心から私は彼女を睨んだが、どうやら彼女の言っている事は事実らしい。爆音に混ざってメロディが響いていた。

飛び交う阿鼻叫喚。

未だに続く爆発音。

どう考えても、事故ではない。

規模がおかしすぎるし、あちこちで黒煙が昇り始めていた。

「伏せてッ！」

「きゃああッ！」

数度目の爆音が、至近距離で炸裂した。

爆音の正体は上空から降り注ぐ炎岩マグマの塊だった。

それが至近距離で落とされた今、私達三人には粉々になった炎岩が火山弾のごとく襲いかかってきていた。

Cyrph (風よ)

咄嗟に私が唱えたのは、風の守り。

エメラルド色の光を放ち現れたのは、『渦巻く風』の絵柄のカード。腰に取り付けたカードケースから自動的に引き抜かれ、私の前に風圧を発生させて浮遊し続ける

「大丈夫ですか？ チハルっ!？」

背後にいるはずのチハルから返答がない。

風圧の結界を保持したまま振り返ると、瓦礫の裏から伸びる白い脚は、全くピクリとも動かない。

頭部を強打したのか、それとも声を出したくても出せない状態に

なつてしまったのか。がれきに隠れてわからないが、埋もれているわけではないのは確かだ。

私は単なる気絶であることを願う。

目前には今にも被弾しそうな火炎を纏ったままの岩石。避けることはできない。かといって、気絶した者を抱きかかえて避けるなどもっと無理。

メリ姉も今日は買い物に來ただけから契約獣はお留守番させていると言っていた。

風圧の壁といつても岩石を連弾されては敵わない。

ならば！

「メリ姉！」

「……………うう、な、……………どうなったの……………？」

背後で彼女の声がした。どうやら無事だったみたいだが、少し声には気がない。

「動けますか」

「大丈夫よ。少し足を擦りむいただけみたい」

その事に安堵する。これで彼女まで負傷して動けなかつたらと思うと。

しかし、大丈夫だったのならば、行ける。

一枚を頭に浮かべ、強く魔力を集中させる。

「アリス？」

余った魔力の大半を風の守りへと集中させ、私の様子に気が付いたメリ姉に向かった。

「誰が、こんな馬鹿な真似をしているのかわかりませんが、こうなつては仕方ありません。二人だけ先に学園に離脱させます。

さあ、ちゃんと握って下さいよ」

チハルの手をメリ姉の手と結ばせ、さらに一枚のカードを彼女に押し当てる。

それは『表裏の昼と夜』の絵柄のモノ。示す効果は？空間転移？であり、その定員は二名だけだった。

本来ならば、空間転移なんて高等魔術、見習の私には有り余るものだったけれど、これは特別。

メリ姉たちの足元に を含んだ陣が輝く。

「学園を思い浮かべて下さい。」

行きます！」

「ちよつと待」

Tranp(跳べ)

白と黒の光がカードから二人を包み込み、陣の中に取り込んでいった。これでアリスの命令通り、二人を学園に向かって飛ばしてくれたはず。

「多少のタイムラグはあるものの、数十秒の誤差で到着するだろう。」
「私も早く避難しなくてはならない。」

遂に風の守りにも穴が開き、小さいながらも爆散した数個の破片が体を穿つたのだ。

むき出しの両足を中心に、右半身がまるで切り付けられたかのような傷がいくつもでき、少量ながらも出血していた。

しかし、痛みを訴えている余裕はない。再度『風』と唱えて、風の守りに魔力供給を再度行い、走り出す。

『転移』のカードはさつき二人を飛ばすのに使ってしまったから、彼らが学園についてカードの効力がなくなるまで使えない。他にアリスが使用すべきカードは今はない。

使えないわけではないが、使ってもこの状況を離脱できるものではないという意味で無いのだ。

だから走るしかない。

「きゃっ！」

戦場にも似た道を必死に駆けていた時だ。
悲鳴に反応して体が瞬時に反転する。

「っ　　危ないッ！！」

其処には転んでしまった幼子と　　降りかかる炎岩が迫っていた。

Cyrph（風よ）　　Lei（あの子を！）

水色の光を帯びた風が、私から瞬時に幼子に絡みつく。エメラルド色のドームがその子を包み込み、

すべてが消し飛んだ。

炎岩が地面に炸裂した。

地面に激突した炎岩は、散弾の雨となる。

たったそれだけのことだった。

自然なこと。

隕石が、流れ星が地球の引力につられて落ちるのと同じ。

だから、何故、こんなところにまだあんな小さな子供が残っているのかという疑問の方が大きい。

母親とはぐれたのだろうか？

はぐれて、どこかに隠れていたのだろうか？

それに我慢できずに、出てきてしまったのだろうか……………。

閃光と爆音。

それによって、私の視覚と聴覚は一時的に失われた。

「うう、うぐつ……おねえちゃん……」

土煙の中、誰かが私に触れている。

それが初めの戻ってきた感覚。

次いで体中に走る激痛。

見えたのは、不安に顔を歪めた女の子の顔。今しがた助けたあの
転んでしまった幼子だ。

「……………け、怪我、ない？」

私の言葉に、女の子はぶんぶん千切れそうになるんじゃないかっ
てくらい強くなずいた。

「……………おねえちゃん、真つ赤だよ、お顔もだし、お腹も……

…起きてよ。はやく行こうよ！」

涙目で、鼻声でそういう女の子。けれど、

ああ、もう私、駄目なんだ。

私はもう自分がこの子と一緒に避難できない事を悟った。

なぜなら、自分がこの子の弱い力で引っ張られていたことに気付
いたからだ。

手を握られている事に気付けなかったのに、自分の視界が不規則
にぶれたことによって、それを認識した。

それはどうしようもなく、自分の体がイカれてしまった事を意味
していた。

「あなただけで逃げて……………お兄ちゃん、もう……………疲れちゃ
つたから……………お願い……………」

「……………やだあ、やだよお……………いっしょにいこうよお……………」
きつと精一杯引っ張っているのだろっなあ。

ひどく視界がぶれている。

私を動かせないと見るや女の子は、私の服を引っ張ったんだと思

う。それによって、制服の上着がカードケースの留めに引つ掛かり、中身がこぼれ落ちた。

「あっ、お姉ちゃんのカードがっ！ うっ！？」

女の子がすぐにカードを拾い出す。

けれど、すぐにその身を怯ませてしまった。

何故か。

女の子の手には、確かに私のカードがあった。けれど、それはもはや以前の姿ではない。

私の身体からあふれた赤い血液によって、まがまがしく変貌していた。

まだ純粹で無邪気な幼い女の子には、これはあまりにも抵抗があっただろう。

けれど、少し見つめ、ぐっところえた女の子は地面に落ちているカードに手を伸ばす。

その表情は、恐怖と不可解。

怖い、とにかく怖い。何が怖いかと言えば、何だと言えないことが怖い、何が起こっているのかわからないことが怖い。

きっと誰でも同じだろう。

私も、怖かった。

もう動けないことが。

この子を送り届ける力がない事が。

最後まで彼女たちと一緒に居られなかったことが。

「……ねえ、そのカード……見せて……」

ふと目に着いた。

赤く染め上げられた中に1枚だけ。

違和感を覚えた。この漢字には既視感がある。これは。

「これ？」

「うん」

そう言っただけで女の子が手渡してくれたのは、真っ白な、まだ使う事の出来ないカードだった。

私のカードは【魔の樹木】という神秘を綴じた魔導書とカードだ。私たちが中等学部に入學して初めての《魔法学科》の授業で召喚したもの。あの学園では中等学部になると魔法について学ぶ学科《魔学》が増える。

その授業の初回授業で簡単に説明を受けた私たちは校庭に出て、それぞれ召喚の呪文を唱えた。

この授業では【契約獣】を必要とする場面が多々ある。皆召喚に成功した生徒たちはそれぞれの様々な種族の動物を傍らに置いている。

最後に契約の儀式をすればすべては完了する。自分の血を魔獣に飲ませること。それで終わり。

【契約獣】とは、大半が生き物だ。むしろ生き物でない事例が、圧倒的に少なかった。

だが、無生物であっても一様に自立できるものが召喚されていたのだが、私が召喚したのは魔獣でもなければ、生物でもなく、ましてや精霊でもなかった。

私の前に現れたのは、幅3メートル以上の巨木だった。

固く白い幹、七色に輝く葉は、今までに見たことがないくらい不思議な魅了を持っていた。こすれ合う葉と葉は、鈴のような金属音を鳴らし続けていることが、また幻想的だった。

それに私が触れた瞬間、それまで好き勝手になっていた音色がそるって鳴り響き、巨木は光を放った。

次に会ったのは、一冊の重厚な本だった。【魔の樹木】と書かれた表紙を開けば、一つの見開きごとに一枚のカードとその効力が記されていた。

これが私と私の【契約獣】との出会いだった。

しかし、全部が使えて仕えるカードではないとすぐに気づき、ちよっぴり落ち込んだ。真つ白なカードもあれば、発動できても指示に従わないカードもたくさんあったのだ。

重厚な本を持ち歩くわけにもいかない私は、説明をできるだけ憶

え、カードだけを持ち歩く。

だが、いつまでも真つ白なカードのままではないのだ。

召喚から1年。これまでに三枚新しく使えるカードが増えていた。

「……………久々。初めまして

『エスベール歪曲の扉』さん……………」

さつきまで真つ白だったカードが、黄色い光を放つとともに絵柄が現れる。描かれているのは『半開きになった扉』。

扉がこの状況にどんな意味を成すのか。不可解な点はあるても、不思議な事に何とかなってしまっうんじやないかという言い知れぬ確信が心のどこかにあった。

Espear（連れてって）

カードが再び、より一層の黄色く暖かな輝きを放ち始めた。

それはさながら太陽のように温かく、心地よい。

「さあ、此処から行って……………」

「うん、わかった……………おねえちゃんは？」

絵柄と同じで現れたのは、光を内包する扉。それに手をかける女の子はやっぱり私を気にして振り返った。

「ごめんね……………やっぱり無理みたい……………でも、最後にお兄ちゃんのお願ひ聞いてくれるかな？」

「うん！」

女の子は最後にしっかりと返事をして、扉の向こうに抜けて行く。

肆枚目：Are you understand me? (前書き)

やっと過去の投稿に追いついた感じです。

肆枚目：Are you understand me?

国境近くに位置する広大な敷地面積を有するレピアス学園は、先進国家アルフィンシの中でも最大規模の教育機関である。

国境近くに存在するレピアス学園は、その場所が故に、校庭が広大であるのが一つの特徴でもある。学園裏が森であり、時たまここで行方不明者が出る事は稀ではない。

学園の施設として、学習棟、教職棟、図書館塔、男子女子の各寮、食堂　と、合計七つの建物が主立って使用されるものである。

そして、教職棟最上階にある一室　学園長室。

其処には、ある4人の存在があった。

一人は言うまでもない。この部屋の主であり、この学園の最高責任者である学園長。鼻下、顎、頬と白いひげを蓄えた初老の男。その皺の寄った顔は月日と威厳を感じさせるが、それなりの格好をされなければ、何処にでもいる爺さんそのもの。そして、どこかとぼけた表情にも見える。

その学園長が座る仰々しい椅子の脇に、ダークブラウンこげ茶色のスーツを着る学園長に比べれば、当然若い中年の女性。彼女は日ごろから教師をまとめる教師長という立場である。そういう役職に就く者は、大体は生徒に厳しくという姿勢になるだろうが、この教師長の場合、その逆で優しく諭し、導く姿勢に会った。

故に、生徒からも人気はあり、感覚的には母子というものもある。その二人に加え、学年の異なる二人の女子生徒がいた。

彼らは、皆一様に暗い表情をしている。

「つまり、先日国内で発生した謎の爆破テロ事件以来、我が学園の中等学部二年の女生徒　アリス・ウィディアン君が行方知れずで、未だ消息がつかめないということだね？」

学園長は椅子にもたれかかり、長いひげを手漉き、報告を確かめていた。

時期は中心街の爆破テロ騒動が起こってから、丸一日が経っていた。

結果的に言えば、メリアルと千春は無事学園のアリスの自室へと転移し、日が暮れても彼は帰って来なかった。

そして、夜が明けてすぐに二人は、リツカリー教師長の自室へ赴いた。二人はひどく混乱して情緒不安定だったが、其処はリツカリー教師長が宿め、琴の詳細を聞き出したことにより、三人は現在いる学園長質へとやってきたのだった。

「今のところ、その女子生徒については何も情報はない」

「いえ、学園長。あの恰好はこの二人とおふざけであって、アリス君は男子生徒です」

「む、そうだったか。何にしても、捜索願は先ほど事務所の委員に出させた。知らせが届くまで我々には待つしかすることがない故、ハイジエリカ生徒会長たちは、通常授業に出なさい」

学園長は彼女らを見つめてそう告げた。

今は何もできないと。何もするべきではないために、日常を過ごして気を紛らわせると。

「まだ、厳しいようなら私が公欠届を搔いてあげますよ？」

リツカリーの言葉に、メリアルは無言で遠慮し、千春は一礼し、案に拒否した。

そして、誰もが言葉を失った。

誰も何も言おうとしない。

誰も何と言って良いかわからない。

慰めの言葉をかけるのは、まだ早い。

だが、無責任に確証もない事を言うのは非情。全くないとわかりきっている可能性を、期待を持たせることこそ、真実を知った時に希望を持たされた方は痛みを伴う。

彼らは、うまくまとめられるほど饒舌でも、詭弁でもなかったのだ。

長い月日を生き、多くを経験した大人でも。

未だ成長を繰り返し、短時間で多くを学ぶ子供であったとしても同じ。

長時間に感じられる沈黙だったが、実際には長針は五つも回っていないかった。

その永遠に続くかもしれないと錯覚させる時間を破ったのは、一つのノックだった。

「学園長。急で申し訳ありませんが、どうしても面会したいと聞かない者が来ていますが……どうされますか？」

わずかに開いた扉からスツと現れたのは、眼鏡をかけた丸々とした事務員だった。中の状況を目にした瞬間察したのだろう、彼は申し訳なさそうに要件を告げた。

「それは、今でなくてはならないのかね？」

「話を聞くに、現在最も必要とされる情報かと思ひまして。あと、この場に来てまして……その、追いつ返すのもどうかと……」

その事務員は、最後に扉の向こうを覗き、困ったような顔をしてそう告げた。

誰がいるのだろう。応接室ではなく、直接此処まで連れてこさせるのだから、それなりの人物かもしれない。

だが、それよりも彼らの気を引いたのは、「誰が来たか」よりも、「何の情報か」という事だった。

未だ見ぬ来訪者を控え、それまで影のかかっていた四人の表情は、すでに驚きと僅かな期待へと変わっていた。

「……入ってもらいなさい」

学園長の指示に従い、事務員は扉を全開させる。

「……………」

来訪者は無言で部屋の中へと歩を進める。

そして、案内した事務員は、そそくさと退出していった。

残ったのは、去ったと思った沈黙と一人増えた部屋の中の人数。

「……ねえ……」

「……多分私もメリ先輩と同じこと考えてますよ……」

メリーアルと千春は部屋の入り口で立ちっぱなしの来訪者を見て、顔を合わせて小声で言葉を交わす。

「アリス君の手掛かりを持っていてというのは君かな？」

二人がどうも判断に着かない様子でいると、学園長自ら席を立ち、来訪者へと屈み込んで尋ねる。

「……ひう……」

しかし、その来訪者にとって、年老いて眉間や目尻にしわの寄った男が何処か恐怖の対象になったのか、怯えて物陰に隠れてしまった。

「学園長、私たちが相手しましょうか」

「なら、私はジューズでも」

「……ふむ」

生徒二人が学園長の前に出て、教師長は給湯室へと向かう。それに対し、学園長は少し残念そうに背を丸めて元いた席に戻って行った。

「ほら、恐いおじいさんはもういないよ？ お姉ちゃんたちとお話しましょう」

彼女らの声を聞いて、来訪者は椅子の影から顔を出す。

その背後で、批判されて落ち込む学園長がいたが、リツカリーもいなく、誰もフォローする者はいなかった。

その来訪者は、細くさらさらのライムグリーンの髪とくりくりと大きな蒼い瞳を不安から揺らしていた。

そんな様子を見て、彼女らは口々に言う。

「やっぱり子供よね……」

「可愛い女の子ですね……」

二人はやっぱり不可解な点を重視する。

情報を持ってやってきたというのは、七歳くらいのうんと小さな

女の子だった。

「……………これ……………」

女の子が決定的な証拠を出したのは、リツカリー教師が持ってきたジューズやお菓子で十分くらい餌付けた時だった。

「……………どこでこれを見つけたの……………?」

千春は、少女が差し出されたモノを震える手で受け取った。

それは見間違えようのない証拠。

魔獣や精霊の百科事典を読み漁っても該当するものがない

世界でただ一つのモノ。

前例のない使い魔。

彼だけの力。

彼以外が使う事の出来ないカード。

彼の『魔法のカード』であり、彼以外が持ち得ないモノだ。

「それね、私を助けてくれたお姉ちゃんがくれたの。きれいなお姉ちゃんだった。でも、お母さんが助けてもらったお礼を言って返してきなさいって。汚れちゃってるけど、ちゃんと拭いたんだよ?」

女の子の言うように、確かに汚れはあった。

残酷な現実を告げているかのような汚れが。

彼の出血による血痕が。

学園長も教師長も、千春もメリアルも最悪の事態を脳裏に浮かべてしまう。

「……………大丈夫ですよ……………?」

千春がぼつりと呟く。

しかし、誰も答えない。

「……………そういえば、アンちゃんは どうして、その子がうちの学生だっ てわかったの？」

リツカリーは少女アンに尋ねた。

それは至極当然で、重要な問いかけだった。

アリスの使い魔【魔の樹木】は、彼だけの前例がないものだったが、故に学園内では一時噂にはなつたものの、学園から彼女のいる中央街まで聞き及んでいるとは到底思えない。

その時、アンが再び小さなバックからあるモノを取り出した。

それは傷んだ黒い財布だった。

「これ、アリスの財布だわ……………」

それですべてが解決した。

きつとアンの親が、カードと共に財布の中身を拝見したのだろう。そして、彼の学生書を見つけたというのが、事の真相だろう。

「そのお姉ちゃんね、すごくおかしい事言っただよ？」

自分たちの想像と裏腹に、女の子は考えた、思い出した事をどんどん口にする。

「とってもきれいで、髪もサラサラで、お肌もきれいで、美人さんなのに、自分のこと『お兄ちゃん』って言ってたんだー。アンね、どうしたただか、今でもわからないの。お母さんは男の子なんじゃないのかって言うってたんだけど、絶対そんなことないよ。うんときれない人だったんだもん」

女の子が一生懸命そのおかしな点について考える。そのうんうん唸って頬杖を突く様子は、本来ならば微笑ましい物だと捉えられるだろう。

けれど、今はそれが少女以外の胸を酷く締め付ける。

「……………どこまで……………律儀なのよ……………」

メリーアルが遂に顔を両手で覆ってしまふ。

千春はぐつと歯を食い縛る。そうしていないと、涙がこぼれてしまふ。

メリーアルは学生書を手に、千春は【魔の樹木】のカードを胸に

抱え、今にも泣きだしそうに顔を歪める。

そんな二人をリツカリーが背後から腕を回す。優しく彼女らの頭を撫でる。

リツカリーは知っていた。

だから、何か言う前に行動で慰めた。

教師長であるリツカリーは、度々この二人が此処にはいない、もしかしたら今生死も危ういかもしれない少年によく女装をさせて遊んでいた事を知っていた。

三人ともいつも仲が良くて、まるで三姉妹の様に見えるほど、仲が良かった。

でも、彼はとても真面目な性格をしていた。同じく真摯な性格をしている狩園千春と比べても彼の方が勝る。

千春が直線的な真面目さなら、彼は全体を見る応用性に優れた真面目さでもいうのだろうか。ちょっと気弱で、文句をもらすけれど、投げ出さずにやり通す。

破天荒で天真爛漫なメリアルとは比べるまでもない。彼女は気ままだけれど、そのカリスマ性故に人を引き付けて、物事を成功に運ばせる性質だ。

アンの話を聞いたリツカリーもメリアル達と同じようなことを思った。

なんて、真っ直ぐなんだろう。

きつと逃げる時、スカートは走りにくかっただろう。

永井桂もうつとうしかったことだろう。

彼女たちが用意してくれた服は、彼女たちの私服でもあるモノが多い。だから、きつと脱ぎ捨てるといふ考えは、彼の頭には少したりとも浮かばなかったんだ。

五分後、アンは案内した事務員が迎えに来て、帰って行った。

残された四人は静寂に包まれる。

そして、いつしか同じ思いを抱く。

祈り、願い、強く望んだ。

あの優しい少年がどうか無事でありますように、と。

「カリソノ。気持ちは分かるが、いつまでもそのままではいられないぞ？ 待っている間に出来る事は多くあるはずだ。例えば勉強とかな」

「はい」

私は短く返事をする。ただそれは無意識に声を掛けられたから、応対したというごく自然に出たものだった。

担任は全く空気の読めない様子で、そう告げると、私の席を過ぎ、最後まで生徒たちの視線に気づくことなく、背後の扉から教室を出て行った。

「チハルさん。大丈夫ですか？」

「うん。大丈夫」

担任が出て行ってすぐに女子数人が私のもとへ寄って来た。

しかし、私が担任とほとんど同じ態度を示すと、彼女らは困惑したようになり、最後には逃げるように去って行った。

それでも、粘って、私を励まそうとする生徒も数人いたけれど、授業開始五分前には、誰もいなくなっていた。

誰よりも近く、多くの時間を共にした彼がいなくなって、すでに

一週間が過ぎつつあった。

私は午前の授業の大半を無断欠席した。

あのまま教室に居ても、周囲の生徒にとっては息苦しいだけだっただろうし。

歴史系の準備室。

其処は、彼の居場所だった。

今は使われていない一室で、表札には『準備室』としか書かれておらず、明確になんの準備室だったかわからない場所だった。

扉を引き、中へと足を進める。

『おや？ また来てしまったんですか、チハル』

彼の気配が感じられる。

此処はもうすでに、彼のもう一つの個室で隠れ家だ。本棚からあふれる書物、戸棚の食器の位置、コンセントから抜けているポット、窓を隠すクローバーのカーテンはつい最近取り替えられ、元の黄ばんだものは掃除用具として再利用されているはずだ。

そして。

「アリス……………」

この部屋で一番彼の温もりが残留している机。気分を出すために彼の白衣をまとい、椅子に座り、机に突っ伏す。

そうして彼の存在を感じられるとは思えないが、その時の私は錯覚を覚える。

『此処で寛くわんがれると困るんですけど…………』

ソファーに鎮座し、漫画を手にお菓子を食べる私やメリ先輩を注意する彼。

『実験中なんですから、話しかけないでください。これ失敗すると場有髪するんですから！』

かまって貰えないために、文句を言い告げる私に彼は脇目もくれなかった。

そんな様子が脳裏に蘇り、あたかもその情景があるかのように見えた。

そしてさつきまで彼が此処に座って、昼寝してたり、魔学の研究をしていたかのような温もりを感じた。

それは単に窓側にあったその机が今日の陽気に照らされたただけだという事は、ちゃんとわかっていた。

けれど。

「チハルちゃん」

現実に引き戻された。

同じ境遇の人に。

同じ人を待っている先輩に。

「……生徒会長が授業をサボっていいんですか」

「何言ってるの？ 自分もサボってるじゃない。お互い様よ」

メリ先輩は、私がさつき思い返した情景と同じように、ソファへと腰を埋めた。

その様子を見た途端、私はさらに胸が締め付けられた。

そのソファは彼女が座悪には、十分な余裕があったからだ。

「こっちにチハルちゃん、それで真ん中にはアリスがいたのよね」

私と先輩が両端に座る。

けれど三人だったのが、今は二人。

当たり前の三人組。

三人掛けのソファ。三人並んでお茶をした。三人でそのまま居眠りをしてしまったこともあった。

抜けた真ん中^{ヒース}。

バランスを崩して、心の中はもう、ぐちゃぐちゃだった。

「限界なんじゃないですか？」

顔を上げて、隣の彼女を見る。

「っ」

バツと顔を上げ、私とメリ先輩の視線がぶつかった。

自分で自分の身体を抱き、身を震わす先輩。

「限界、ですかね……………わたし達」

ピタリと先輩の動きが止まる。

「先輩」

私が声をかけるよりも先に、メリ先輩は涙を流し、私は彼女に抱きしめられていた。

痛いくらい抱きしめられた。

私の手は、抱きしめる彼女の手に無意識に添えられていた。

「……………うん、もう無理みたい。だって、だってだってっ！

大事な人が二人もいなくなっちゃったんだよっ!？」

二人……………アリスともう一人は……………ああ、そうか。

私を抱きしめる先輩は、自分よりとても小さく感じられた。

「先輩はアリスのお兄さん　フィレルさんっていう人を好きだった？」

それを言った途端、さつきまで止めどなく流していた涙は止まり、震えも止まった。

けれど、それは一瞬で、すぐにまた泣き出す。

話に聞いていただけだけれど、この反応から見ても私の判断は間違っていないかった。

先輩は背後から私を抱きしめている。だから、肩は少し温もりをもって濡れていた。

好きな人。

少し、わかるかもしれない。

存在の喪失によって、手元にあったものが明確なものになるというケースが多々あると、本で読んだ事がある。

私の場合もそうらしい。

「……………チハルちゃんたら」

鼻をすすり、何かに気が付いた先輩が顔を上げて私を見る。

その表情は決して笑みと言えず、かといって悲しみ一色というものでもない。

背一杯の虚勢、といったところ。

何に強がつて、何を取り繕うと言え、それは自分自身だろう。けれど、彼女は自分の心配ではなく、他人の心配をした。

「そんなに泣くなら、ハンカチくらい出しなさい。部屋の中なのに雨が降ってきたのかと思っただじゃない」

先輩はそういって、私の顔に自分のハンカチを当てた。

え？

一瞬何の事を言っているのかわからなかった。

そして自分の顔へ手を持っていく。

そこは決壊したダム状態。

収まる事を知らない涙腺は、大粒の滴を流し続けていた。

「あ、そっか」

私は彼女以上に、彼のいない世界を悲しんでいたのだ。

悔んでいた。

恨んでいた。

妬んでいた。

この世を不条理と決めつけて。

私から彼を奪ったすべてを世界に押し付けていた。

すべての苦しみも。

すべての辛さも。

「覗き見なんて、趣味悪い、ぐすつ、悪い……」
涙と一緒に心がどんどん想いが溢れて、溢れすぎた。零れて流れ続けたせいで、私の心はいつしか、誰かが居なくなつた分が空っぽになつたような。
そんな喪失感に浸された。

メリ先輩とともに、本当の心を打ち明けた翌日。
私は人生で最大級の混乱の渦にいた。
「皆が驚くのもわかる。わかるぞ。この時期にこんなタイミングでこんな転校生が来てみんなビックリだろうが」
「担任が全くいつもの調子を崩さずに教壇に一人の生徒と共に立っていた。」

夜明けを映したかのような真つ青の髪。
夜に浮かぶ月の様に輝く黄金色の双眸。
人形のように細い手足。
正確に整えられたかのように、プロポーション。
其処にいるのは、新入生だろう生徒。
その隣の担任は、間違えるなよと念を押してつづけた。

「彼女は『アリス・ノインンス』だ。ドッペルゲンガーの様だが、『ウィディアン』ではないぞ？」

担任は朝のホームルームであるのに、やたら元気に告げる。
その背後の黒板には、彼の唯一目置ける技術であるう綺麗な字

で『彼女』の名を書き記してある。

そして、『彼女』自身が一步前出て一礼。

「先生、皆様への挨拶の代弁有り難う御座います。けれども、どうでしょう？」
『こんな転校生』はないんじゃないやありません？」

『彼』に酷似した転校生は礼儀正しくも文句を言う。

その素振りは、勝気でどこことなく生意気そうだったけれど
確かに女の子だった。

当たり前に女子の制服を着て、当たり前のように男子よりも髪に
艶があり、肌には張りがあるきれいな容姿。見た感じも女の子として
の雰囲気は漂っている。

「みなさん、初めまして」

彼女は女性らしくスカートの両端をつまみ、

「本日このクラスに転入しました、アリス・ノイネンスです。気兼ねなく接してくださいませ」

肆枚目：Are you understand me? (後書き)

似すぎている転校生ノイネンス。

蒼髪金目の美少女

さて、彼女はいつたい何者なのか。

それはさておき、今回はまた別の場所で行った物語を予定しています。

今回は水曜日あたりに投稿する予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2641z/>

所在探し -ver.Remake-

2011年12月11日20時50分発行